

子供達の成長の過程に優れた教育環境が必要であることに、誰も異存はなからうが、その教育環境のひとつに、良い自然があって、それと充分な接触をもつことは、むしろ、必要不可欠のことである、ということについては、今まであまり気づかれていなかったようだ。

美しい豊かな自然の中に青少年を……というスローガンは、むしろ観念的次元でしか解釈されていなかったようだ。各地にてきる青年の家や、少年自然の家などが、豊かな自然の中に、ただ便利な都市文明をむき出しのまま持ちこんで、その自然の特性とはまったく無縁なテニスコートを作ったり、プールをこしらえたりして、およそあたりに不釣合な音量のスピーカーを鳴らして体操をやったり(つまり都会の中の体育館で充分できることを)していることは、自然を無生物的次元でしかとらえていない、何よりの証拠ではなかったか。

昔、といっても、今から三十〜四十年ほど以前のこと、住宅地の近辺には、どこでも「原っぱ」と呼ばれる広場があった。

その原っぱは、真中に、踏み固められた裸地が、その周辺には、オヒシバやカゼクサ、チカラシバなどかななる踏あと群落が発達し、周辺にはいく本かの立木があって、多少の起伏があり、雨あがりなどには、思いもかけぬ大きな水溜りができたりした。

そうした「原っぱ」には、その近くにすむおよそ同年輩の少年達が集まって、小さな野蠻人よろしく、閉鎖的社會を形成して遊びまわっていた。

この小集団は、ニホンザルの社会構造と、まったく

良く似ている。心理学者は、この年代をキャンピング・エイジというが、まさに言い得て妙である。
ボスがいて、序列が明確であるが、ボスは力が強いだけでなく、人徳がものをいう。

この小集団を構成する各個人の連帯感や、集団に対する忠誠心は熱烈なもので、そのために、かなりの自己犠牲も奉仕も、厭うところではなかった。誰に教えら

少年と自然のふれあい

一本の棒が彼らの夢をふくらませた

柴田敏隆

れるでもなく、こうした集団形成ができるのは、社会的動物といわれる人類に、天性具わっている本性なのであろうか。

この小集団の中では、それぞれが分に応じ、能力に応じて、自分の持ち味を活かし、全体に奉仕することが可能であった。そして、「悪戯の文化」は、先輩から

後輩へと絶えることなく伝承されていった。後輩予備軍としては、「ミソツカス」と呼ばれる幼児まで付随し、しかもこのオミソ達は、かよわいがゆえに、先輩達から充分庇護されていた。

ここに、ひとつのライン・システムをみるものである。今の街場の子供は、スタッフ・システムでしか遊ばない。野球にしろ、サッカーにしろ、同年代同能力の者の集まりが前提であり、しかも、ルールが先行している。プレイグラウンドまでが、規格で限定されているのである。友情は育つかも知れないが、伝承する文化はない。ルールで規定されるので、その必要がないわけである。

原っぱのような、あまり上等とは言えない自然の中であって、子供達は、自らの力で創造し、工夫して、遊びの中で、自然の持つ多様性に対処してゆく術を学んだ。

一本の棒が、多種多様な用途を持つことを発見するのも、こうした機会にである。おかげさ言えば、一人の少年が、その成長過程の中に、人類文化史を短時間の中に再演するといった、重要な意義を持つわけである。したがって、一本の棒を選ぶにもいくつかの試行錯誤があつて、そこから鋭い選択眼が養われてくるのである。

一本の棒は、遊びの世界では実に豊かなイメージネーションを秘めていた。チャンバラ(こっこ)では、正宗や虎徹のような銘刀になり、股ぐらに挟んで走れば、たちまち生啖(なまはら)や磨墨(こぼろ)のような名馬に早がわりした。

自ら遊び、自ら用い、自らを援けて、限らない幻想の世界を築き上げてくれた一本の棒に、こよない愛着

を覚えるのは、どの少年とて同じことであろう。

捨てるのが美德とされ、大人のさかしらにイマジネーションまでおしきせの既製品が、お金次第でいくらでも手にはいって遊べる今の子供達に、おもいやりの心が何となく稀薄に感じられるのは、自然から疎外され、自然に学ぶ経験が乏しいからではなからうか。

大きくなってからみれば、あまり立派でもない二次林などが、それでも当時は、今とは比較にならないほど豊かに連なっていて、少年の目には、強烈なりアリテイーをもちながら空想の世界につながっていた。その暗がりには、狐狸妖怪のたぐいから、黄金バットや怪人二十面相までひそむかとも見えたが、一面では、陽をあびて光り輝くスカイラインの彼方には、無限の可能性を秘めた未来の世界が横たわっているに違いないと、眉をあげ、大きく息を吸っては、希望に胸をふくらませたものであった。

山の向こうは、一面の宅造地、その先は公害の街とヘドロの海といった現況は、何たるイマジネーションの貧困であろう。

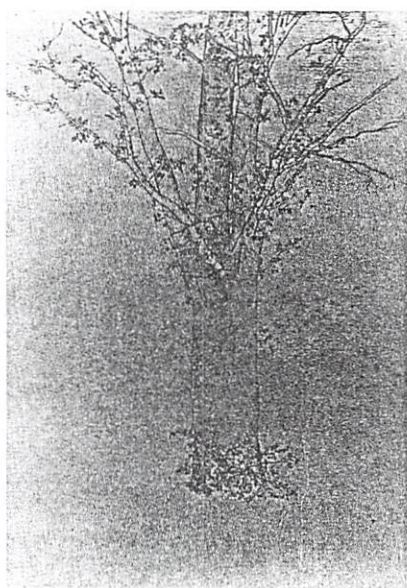
✦

都市文明が、自然と対決し、自然のもつネガティブな要素を克服しつつ、今日の繁栄をもたらしてはきたものの、その過程の中で、失われた大きなものはいくつか、今まであまり気づかれずにきた。少年と自然とのふれあいなどもそのひとつで、単に望ましい程度のレベルでなく、今となっては、むしろ生理的次元で、必要不可欠なものひとつである。

動物としての桎梏をまぬがれない人類という次元で

「思慮の文化」は、先輩から

考えると、子供は、成長する存在ではあるが、反面、死ぬものでもある。近代文明が、子供の死亡率を極度に低くせしめたメリットは、正當に評価されるべきであろうが、反面に、その成果から生じたおごりが、子供は死なないもの、死なせてはならないもの、という絶対的な要求となって、子供をとりまく環境から、危険と目されるもの一切を徹底的にとりのぞこうと努力



する。その行過ぎが、いわゆる過保護となつて、子供のバイタリティーを抑圧していることは、あまり気づかれていない。

たとえば、街なかの児童公園をみよう。柵で囲われ、舗装され、いい合わせたように、ブランコやジャングルジムのような遊具がおいである。爽竹桃やプラタナスはあっても、登って遊べるような木はない。動物園

の世界を築き上げてくれた一本の柵に、こよない愛着

の猿山と全く同じではないか。ソックスと靴底を洗って足の裏だけ地面に接して遊びはするが、裸の皮膚が、じかに大地に、むきだしの土壌にふれるような遊び場はない。

どろんこは不潔で、自然の山野は危険という母親達には、それならば、四エチル鉛やベンツピレンの充満する都会の空気は、病原細菌や寄生虫がいなくても安全だと信じているのだろうか。一瞬に生命をうばう交通災害は、山野の危険より、安全度が高いとも思っているのだろうか。

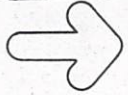
子供は死ぬもの、怪我をするものという基本的認識に立って、そうしたネガティブな要素から、子供達に、いかに自分自身を守り、それに対処していくかを、遊びの中から体得させていくには、今のプレイグラウンド式の児童公園は、むしろ不適な存在でさえあろう。

昔の子供は、何かにつけてよく死んだ。子を失ったひとびとの悲しみはいかばかり深かったであろう。こればかりは、昔も今も変わらない。しかし、その悲しみの底からうまれた諦観が、人間の力ではいかんともなすがたい自然の摂理に、論理を超えて、きわめて謙虚な姿勢をとらせる母胎となっていた。

文明の勝利がそうした諦観を忘れさせ、謙虚さを失わせるとともに、世は終末の様相を帯び、人類滅亡の危機が、真剣に論じられるようになってきた。

わずか半世紀にも及ばない過去の時代における、子供と自然との関わり合いのパターンの中に、人間の自然への対処の仕方について、深い示唆にとんだいくつかの要素を見いだすものである。

DATA: アニマ・データ・ページ



それぞれの記事の中で収容しきれなかった資料、参考資料、用語解説、筆者紹介などをこの欄にあつめました（本文中には*が付してあります）

page

2 ●今月の主張

柴田敏隆(しばた としたか) 1929年、横須賀に生まれる。東京農林専門学校卒業。現在、横須賀博物館学芸員。哺乳動物学会員。日本鳥類保護連盟評議員。日本野鳥の会理事。著書「鳥の話」千趣会

5 ●富士山麓・青木が原の地下生活者

今泉吉晴(いまいずみ よしはる) 1940年、東京に生まれる。1964年東京農工大学農学部卒。長岡市立科学博物館、国際キリスト教大学助手を経て、現在、哺乳動物を中心とした、動物行動学の分野で活躍。

*赤色電球による観察 夜行性動物の多くは色盲で、しかもスペクトルの長波長の部分、とくに赤色部に感じない。つまり赤色光で照明された部分は彼らにとってくらやみと同じである。イギリスのH・N・サザン氏によると、ネズミ類、アナグマ、キツネ、フクロウ等を、赤色光で観察することが可能だという。この方法は広い範囲を常時観察できるから、視野がせまく、解像力の悪いノクトビジョン等の高価な暗視装置よりはるかに有効である。双眼鏡を併用するのがよい。動物園等の夜行性動物の展示に赤色光が使われているのも、同様の原理による。

*フリージング 8月号データ・ページ参照
*コードラート(Quadrate) 生物の種類組成や疎密など、構成に関する性質を研究する場合、研究対象に合わせて、その最小単位の面積の枠を設けて、統計的に調べることがある。この枠をコードラートと呼ぶ。このコードラートの形は4角形が多く、大きさは研究対象によりきめられるが、1m²以下のものから、500m²平方のものまで種々ある。またその目的により、数個のコードラートしか設けられない場合から、一定地域を、縦、横一定間隔(たとえば、1m間隔)で区切り、そこに多数のコードラートを設けて調べる場合がある。

*ガウゼの法則 1934年、ソ連の研究者G.F.ガウゼ(Gause)は二種のゾウリムシを培養液の中で飼育すると、一種は滅びることから、「生態学的地位をとる近縁の二種は同一生息場所では共存できない」と主張した。さらに「生活様式の似たもの同士は、生活能力のあるものの方がその場所を占有する。共存の場合は、たがいに異なるものを食べ、異なる時間に活動する」と主張した。この法則は生態学上、ひとつの重要な生物的調節機構として知られている。

*ヒメネズミ *Apodemus argenteus* 齧歯目ネズミ科。ほぼ日本全土に分布。森林にすみ、

page

低地から亜高山帯に広く分布する。

*アカネズミ *Apodemus speciosus* 齧歯目ネズミ科。日本全土の低地から山地にかけてきわめて多く見られる、最も優勢なネズミ。

*カゲネズミ *Eothenomys kageus* 齧歯目ネズミ科。関東および中部地方に分布し、ふつう低山の森林にすむ。

*ヤマネ *Glirulus japonicus* 齧歯目ヤマネ科。本州~九州の山地に分布する。1属1種で日本特産。

*コモグラ *Mogera wogura imaizumii* 食虫目モグラ科。アズマモグラ(*M.w. wogura*)やヤクシマモグラ(*M.w. kanai*)とは中間型があつて連続しているため、同種といわれる。山地にすむ。

*ヒミズ *Urotricus talpoides* 食虫目モグラ科。本州~九州の低山から山地にすむ。日本特産。キュウシュウヒミズ、シコクヒミズ、ホンシュウヒミズなどの亜種が知られる。

*ヒメヒミズ *Dymecodon pilirostris* 食虫目モグラ科。本州、四国に分布し、ふつう亜高山~高山にすむ。モグラ科で最も小さく、最も原始的。

*トガリネズミ *Sorex shinto* 食虫目トガリネズミ科。北海道、本州、四国に分布し、ホンシュウトガリネズミ、エゾトガリネズミ

page

の2亜種に分けられている。

*ジムグリ *Elaphe conspicillata* 赤褐色の美しい光沢のあるヘビ。1mくらいになる。日本全土の平地から山地の森林に多く、よく土中にもぐり、小型の哺乳類を専門に食べる。亜高山以上には、よく似たアカジムグリがいる。

参考文献

今泉吉典他「富士山の小哺乳類相、1.哺乳類群集と個体群分布の要因、特に威力競合について」哺乳動物学雑誌 4 63-73 1969

今泉吉晴他「ヒミズとヒメヒミズにおける「すみわけ」」動物学雑誌 81 49-55 1972

柴内俊次「哺乳類における種の問題 分布と種間関係を中心に」哺乳類科学 14 10-25 1967

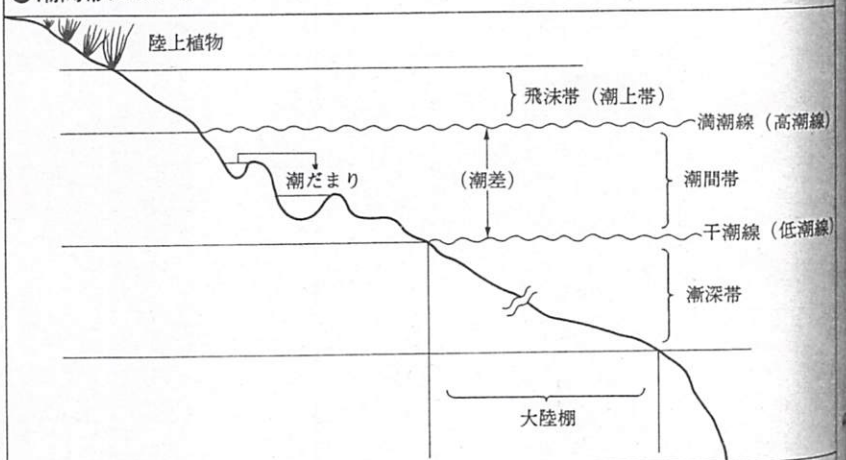
Mitosi Tokuda "Small mammals from Hakkoda (Aomori prefecture) with special reference to „allopatric„ shrew-moles in this district and other districts of Japan" Ecological Review 13(3) 129-134 1953

21 ●華麗なる幻視の魚

この記事は「La Vie des Vêtes」誌の1971年6月号に掲載された「Les Papillous de la Mer Rouge」の全訳である。また写真は

●潮間帯について

(P.69~73参照)



潮間帯とは、最大満潮時の海面(満潮線)と最大干潮時の海面(干潮線)との間の区域。高潮線と陸上植物帯下限との間の区域は飛沫帯(潮上帯)。低潮線と大陸斜面との間の区域(大陸棚に相当する区域)は漸深帯と呼ばれる(図参照)。高潮線と低潮線間の垂直距離を潮差といい地方によってことなる。たとえ

ば本州中部太平洋岸では約2m、瀬戸内海中央部で約4m、また本州中部の日本海側では約0.3mである。潮差の大きいところでは潮間帯の範囲は広く、したがって潮間帯をさらに上部、中部、下部に細分することができる。また低潮線直下の漸深帯上部を亜潮間帯と呼ぶこともある。

特集 チョウゲンボウの求愛行動

写真 宮崎学
文 加賀崎武



チョウゲンボウは、体型がハヤブサに似た猛禽類で、本州に生息するもの多くは、漂鳥として生活している。が、この鳥の生態については、依然として謎にまつまれている。

長野県松本市郊外の中山丘陵で、この鳥が繁殖するのを知った加賀崎氏は、七年間にわたってその行動を探った。今回は、繁殖期に展開される求愛行動のパターンを中心に多様な行動を追い、さらに、その意味を究めた報告である。

同時に、長年、チョウゲンボウをレンズにおさめている宮崎氏の貴重な記録が、行動の一端を再現している。

新連載マンガ 《動物の世界》手塚治虫

文 岩本光雄 写真 吉野信

◎独立企画 世界のサル

現在地球上にサル類は約二〇〇種いる。サル類の特徴の一つは、下等なものから高等なものまでの差が大きく、形や色など、実にバラエティに富んでいることだ。現生のサル類の全容を紹介する。

アナグマの観察

十四歳と十二歳の二人の息子とともに森にひそんだ夜のアナグマ観察行。

オイカワ・砂けむりの中の産卵

丸山俊幸

あるキリンの誕生

野毛山動物園

六月一日、キリンのキリ子が出産した。これはすべてを見守っていた飼育係の記録である。

◎愛鳥自伝 中西悟堂

◎自然の散歩道 東海道自然遊歩道を行く 富成忠夫

◎動物科学小説・おおうみがらすの最後 A・エッカート / 浦本昌紀訳

◎獣師の間わず語り

◎ご期待ください。



●中国の鼠(コウモリ)

編集後記

◇富士青木カ原といえば大原生林として知られたところでした。しかし本特集で取材したところでは、登山道両側百メートルの天然記念物指定の場所をはずれると、相当の広範囲で伐採されています。この原生林だけは残しておきたい自然なのですが……。

◇「淡水魚保護事業の現状と問題点」というパンフレットが編集部に送られてきました。これは淀川の本流わきに発達した池沼地帯に生息するイタセンパラというタナゴ属の淡水魚が絶滅に瀕していることを訴えたものです。イタセンパラという小さな種が圧迫されていく過程で人間たちの利害が複雑にからみあっている様子がうかがえて読了して感慨がありました。

◇前号の会員ページでも触れたのですが政治の中の動物保護をもっと考えていかなければと思う次第です。昨今の新聞紙上をにぎわした魚の汚染問題にしても、すでに今年のはじめ遠いヨーロッパの地で、いみじくも日本の直面する問題は、食糧資源としての海洋汚染だとローレンツ博士がアニマのメッセージの中で指摘していたことは考えさせられました。

◇京大の川那部浩哉先生にお願いして日本の代表的な淡水魚アニムの行動を特集に組もうと考えていますが、この一、二年小さな川も護岸工事がすすみ、自然そのままの川が少なくなり、しかも清流もよほど上流でないといめぐりあえなくなっています。本誌カメラマンが何度か水中撮影をこころみていますが、なかなか天然のアニムの姿を読者のみなさまにお見せできるものが得られず困っています。魚はかりてなく川に生きるカワウ

ソ、カワセミなどの動物がコンクリートの護岸工事によって影響を受けていることは事実です。しかし、実際に洪水が起こったときはそこに生息している動物のことなど考える余裕をなくすのが人間です。人間の生活との関連の中で動物を飼っていくことがまだまだ当分は続きそうです。

◇ニホンザル・シリーズ「ゴザルの遊び」を執筆いただいた森梅代さんは約一年間の予定でエチオピアの高地にのみすむゲラダヒヒの調査に河合雅雄先生ら一行三名と去る六月七日出発されました。このヒヒは群れの社会進化の上に重要な位置を占めているサルで、明年その報告を本誌にいただくことになっております。

◇中西悟堂先生の「愛鳥自伝」はもう一回だけ休載いたします。夏に入って徐々にご健康を回復しておられますが、本復を待って次号から掲載いたします。(高橋)

野生からの声(アニマ)

9月号 1973 No.6
一九七三年八月十五日発行
定価
半年(6冊)……2,100円
1年(12冊)……3,800円
2年(24冊)……6,000円

編集人 高橋 健
発行人 田辺 徹
発行所 株式会社平凡社
東京都千代田区四番町四
郵便番号 一〇二

電話 東京〇三(二五)〇四五一番
振替口座 東京 二八六一四番
印刷所 株式会社東京印書館

©株式会社平凡社 一九七三年